

研究課題 (テーマ)		学習相談室の開設による基礎教育の充実	
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	工学部・教養教育	教授	福原 忠
	工学部・教養教育	准教授	上谷 保裕
	工学部・教養教育	准教授	室 裕司
研究結果の概要			
<p>近年、学習する意欲はあるにもかかわらず</p> <p>①教科書など、文献を読み解く能力が不足、内容を十分理解できない</p> <p>②教員に質問に行くことに抵抗を感じ、個別指導を受けられない</p> <p>など、能力や経験の不足によって効率的に学習できない大学生が増加している。本プログラムでは、物理学の講義を不合格になった学生に対し、本学の再試験制度を活用して、物理のみならず、上記のような一般的な「学習する能力」の涵養を目指すものである。</p> <p>本学の再試験制度においては、試験実施前の自習が義務付けられているが、物理学の再試験においては自習期間を約3ヵ月と長期に設定し、その間に</p> <p>①与えられた課題の自習</p> <p>②自習の過程で生じた疑問を「学習相談員」に質問する</p> <p>というプロセスを3回行うことを再試験受験の条件とし、いわば強制的に「自習と質問」を体験させることで「学習する能力」を身につけさせることをねらった。再試験終了後、受験者に対して行ったアンケート調査によれば、「これまで質問にいきづらいつ感じていたので、こういう機会を与えられてよかった」など、強制的に質問をさせられることに対して好意的な意見が圧倒的に多く、本プログラムの有効性、および、学習する意欲はあったが学習できなかった、という現状があらためて確認できた。加えて、学習相談員には非常勤講師に加えて本学の4年生と大学院生を多く雇用したが、アンケートで「先生は緊張するが先輩なら気安く質問できる」という感想を述べる1年生が多く、上級生による学習指導が基礎教育において有効であることが示された。</p> <p>また、相談員を務めた上級生にもアンケートを行って業務の感想を聞いたところ、ほとんど全員が面接指導を行うことは、「基礎科目の復習、プレゼンテーションの実地訓練、など自己の能力向上につながっている」と感じていることがわかった。</p> <p>このように、本プログラムは、1年生から大学院生までの知的能力を向上させ、大学の活性化に貢献したと考えている。</p>			
今後の展開			
<p>今後も、学習相談室の活動を通じて、本学の基礎教育の充実、および、大学の活性化を図ってゆく。</p>			